

## 2. 研究の詳細

プロジェクト名	小学校音楽科における楽器を用いた音楽学習と楽器選択の変容		
プロジェクト期間	平成 26 年度		
申請代表者 (所属講座等)	山中和佳子 (音楽教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	無し

### 1. 研究の背景と目的

楽器から音を生み出す行為は、「身体という道具の使い方そのものを「知る」(佐伯, 2013) ことに繋がると筆者は考えている。今日までの楽器を用いた音楽活動では何が目指されてきたのか、またどのような意味づけが意識的・無意識的になされてきたのかについて歴史と現状から解明することにより、従来から指摘されてきた、楽器の指導が単純作業的な技能指導に陥る可能性があるという課題の解決や、子どもたちに楽器に向き合う面白さと奥深さを伝えていく授業を行うための視座を提供することができると考えられる。

以上のことを踏まえて、本プロジェクトでは、戦後から現在まで音楽科教育に導入されてきた楽器の構造や操作性の特徴と身体性との関連を検討するとともに、これらの楽器を取捨選択し指導してきた教育現場の音楽教育的見解、及び指導実践の特質を明らかにし、子どもが楽器を使って音を鳴らす音楽行為の教育的意味を指摘することを目的とする。

### 2. 研究の内容と方法

本プロジェクトでは、中心的研究課題として日本の学校教育における鍵盤ハーモニカの導入の過程に焦点を当て、①鍵盤ハーモニカの日本への輸入と開発の状況、②鍵盤ハーモニカに類する各楽器の特徴、③楽器の特性とその指導に関する教師の見解、④学習指導要領の内容、及び教科書に見る鍵盤ハーモニカ指導の特質と役割を明らかにするために、文書資料及び楽器の蒐集・調査を行う。

文書資料の調査については、国立国会図書館、東京藝術大学附属図書館、国立音楽大学附属図書館、教科書図書館、東京学芸大学附属図書館、東京文化会館音楽資料室にて、①戦後の音楽雑誌『器楽教育』『教育音楽』『楽器商報』『musik & bildung』等に掲載された、器楽指導及び鍵盤ハーモニカに関する記事、②器楽活動に関する書籍及び教則本、音楽科教科書と教師用指導書を精査するとともに、③楽器の蒐集を行う。

### 3. 研究成果

#### (1) 楽器開発と楽器の特徴

##### ①鍵盤ハーモニカの日本への輸入と開発

戦後日本の音楽科教育では、昭和 30 年代には、ハーモニカが指導の中心的な楽器となっていたが、昭和 40 年代後半から鍵盤ハーモニカがハーモニカに代わって指導されるようになった。そこで、最初にそれぞれの楽器がどのように日本で販売されるようになったのか、その経緯を明らかにした。

ハーモニカは、1891 年ごろドイツの「ホーナー社」から輸入され、第 1 次世界大戦ごろから、国内の真野商会 (のちの大正 9 年にトンボハーモニカ製作所と改称) や、日本楽器製造株式会社 (蝶印ハーモニカ: バッターフライハーモニカ) によって、生産が開始されるようになり、戦前からプロの演奏家や児童が演奏する楽器として、普及した楽器である。昭和前期には、学校によっては唱歌会などの発表会で児童によるハーモニカの合奏が行われたり、先駆的な教師によってハーモニカを取り入れた器楽指導がおこなわれたりした。ハーモニカは戦前戦後にわたって、児童が手にする楽器として広く普及した楽器であった。

その後、1959 年にホーナー社が「メロディカ」という楽器を制作し、日本では同年 3 月に娯楽雑誌に「新楽器メロディカ 穴の代わりにピアノのようなキイを使った新しいフルート風の楽器メロディカが、このほど西独のミュニッヒでお目見得した」と写真入りで紹介されている。この記事は、日本に輸入される前の情報であり、メロディカの日本での最初の紹介だと思われる。

戦後のホーナー社製の楽器輸入に関しては、「東京アコーディオン・ディベラップメントセンター」が中心となっており、1961 (昭和 36) 年には、この会社の働きかけで東京と大阪の 5 つの会社がホーナー社製楽器の特約店となるなど、昭和 30 年代半ばには日本でのリード楽器販売が促進された様子が見られた。1961 年の「メ

ロディカ」の輸入と同時に、「東京アコーディオン・ディベラップメントセンター」は「クラビエッタ」を輸入している。この楽器はイタリア製で、パリの Paul Beuscher 楽器店によって流通販売された楽器である。それぞれの楽器の小売価格は、クラビエッタ 17,800 円、メロディカ 5,000 円で、非常に高価であった。

輸入開始から 2 年後の 1961 年半ばには、全音楽譜株式会社が、「メロディカ」に非常によく似た「メロディオン」を製造し、「リード合奏、鼓笛バンドに最適の楽器」として発売を開始した。また、1961 年末ごろには株式会社トンボ楽器製作所からクラビエッタに似た「トンボ・ピアノ・ホーン」が、「学童はもとより、家庭団らん用として楽しめる楽器」として新発売され、さらに同時期に東海楽器製造株式会社から「ピアニカ」が新発売された。これらの価格は輸入製品よりは安く、メロディオンは 2500 円、ピアノ・ホーンとピアニカは 3500 円であった。

## ②各楽器の特徴

メロディカ（ソプラノ）は、吐く息によって発音され 25 鍵（C<sup>♮</sup>～C<sup>♯</sup>の 2 オクターブ）で半音を出せる楽器である。本体の真ん中から両脇にゆるく逆 U の字型に傾斜しており、リコーダーのように裏側を両手の親指で支えながら、両手の親指以外で演奏するように意図されている。吹き口は、本体上部の真ん中にまっすぐつけられている。これに類するメロディオンは、25



ドイツのホーナー社で当時製造されていた「メロディカ」と収納ケース（筆者私物リペア済み）

鍵で音域が（F<sup>♮</sup>～F<sup>♯</sup>の 2 オクターブ）である。日本の学校教育では、片手で支えて右手で演奏するという指導方法と両手を使う指導法の両方が提示されている。

クラビエッタは、吐く息によって発音され 34 鍵（G<sup>♮</sup>～E<sup>♯</sup>）で半音を出せる楽器である。オルガンやピアノの鍵盤と同様であり、左手で本体を支えながら右手で演奏するようになっている。吹き口は、右手で演奏しやすいように本体上部の右寄りに斜めにつけられている。これに類する「トンボ・ピアノ・ホーン」は 25 鍵（F<sup>♮</sup>～F<sup>♯</sup>の 2 オクターブ）で本体上部の真ん中に吹き口があり、「ピアニカ」は、32 鍵（G<sup>♮</sup>～D<sup>♯</sup>）で本体上部の右側に吹き口がついている。

1961 年には、各楽器会社が競って鍵盤付きのハーモニカを製造していた様子が見られた。これらの楽器は、輸入楽器を模倣しており、キイがボタン式であり両手で演奏するメロディカ系の楽器と、現在の鍵盤ハーモニカに近いクラビエッタ系の楽器が日本で製造されるようになり、それぞれが家庭や学校教育での使用を意図していたことがわかった。

## (2) 学校教育への導入の様相

### ①楽器の特性とその指導に関する教師の見解

1962 (S37) 年 2 月号の音楽教育雑誌『器楽教育』に、鍵盤ハーモニカに関する記事として初めて「トンボピアノ・ホーン」の広告が掲載された。鍵盤ハーモニカの指導に関する記事は、1962 年 7 月号に登場し、1962 (昭和 37) 年 9 月号では、ピアニカを吹いている子どもたちの写真が器楽教育の雑誌の表紙を飾っている。

それらの記事では、鍵盤ハーモニカの名称が定まっておらず、「有鍵ハーモニカ」や「鍵盤ハーモニカ」と呼ばれている。昭和 30 年代後半の鍵盤ハーモニカの特長に関する見解には、ハーモニカやオルガンと比較したものが多く、ハーモニカ指導の問題については、「吹音・吸音の呼吸上のコントロールが困難、出そうとする音を眼や手で確かめられない、どんな調でも演奏する訳にはいかない、和音が出来ない、クレシェンドやデクレシェンドが難しい、跳躍音が演奏しにくい」等が挙げられており、オルガン指導については予算の関係でオルガンの台数が少ない学校があるということが挙げられている。

これに対して、鍵盤ハーモニカは、長所として「鍵盤があるため、出す音を眼と指で確かめられる、押せばす

ぐ音が出る、笛と同じようにタンギングも指導できる、デュナーミクを付けやすい、跳躍音が楽に演奏できる、吹く息だけで演奏するためフレーズを作りやすい、子どもの声域にあった音域であり音色が華やかで音量が大きい、携帯が便利である」等が認識されていたことがわかった。鍵盤ハーモニカは、代替楽器としての有効性だけでなく、1968（昭和43）年に告示された学習指導要領音楽編の「基礎」の学習に生かせる楽器として受け止められていたことが指摘できる。

その一方で、当時の教師たちの見解からは音楽科授業への鍵盤ハーモニカの導入を阻む問題として、価格と堅牢性に対する指摘が見られた。メロディオンが2500円であった一方、ハーモニカはシングル（幹音のみ）ソプラノが380円というように、台数を揃えるには、オルガンよりは安価ではあるものの非常に費用がかさむ。また、当時の教師たちの指摘には、楽器の故障が多いことが多数言及されている。故障によって「鍵盤が動かなくなる、リードが腐蝕してしまう。ピッチがくるってしまう」といった問題と、ハーモニカのように自分たちで修理することができず、修理にも費用や時間がかかってしまうといった問題があった。そのため、昭和30年代は、ハーモニカのように全員分の台数を揃えたり個人持ちさせて音楽科授業へ導入するのではなく、もっぱらクラブ活動の合奏への導入が主であった。導入に関しては、小学校だけでなく中学校でのクラブ活動でも使用していた様子が見られた。

## ②学習指導要領の内容

1968（昭和43）年の内容には、学習指導要領音楽編及びその指導書にも鍵盤ハーモニカの名前は見られない。しかし、1967年に第4次指導要領に即して設定された教材基準には、学校の備品として「鍵盤ハーモニカ」を保有しておくことが示されている。その後、1978（昭和53）年の学習指導要領では、指定楽器は「ハーモニカ」が指定されているものの、「第1学年及び第2学年のハーモニカ並びに第2学年のオルガンについては、学校の実情に応じて、他の同種の楽器に代替することができること」が示されている。また、文部省発行の指導書にはハーモニカの代替楽器について真っ先に鍵盤ハーモニカを挙げている。さらに、鍵盤ハーモニカに代替したときの利点として「鍵盤を通して視聴一体の基礎指導ができることや、レガート奏やタンギング奏が容易にでき、かつ音量の豊かさを求めることが出来る点などが主なものである。次に、オルガンの代替楽器としては、当然、鍵盤を有する楽器ということになる」ことが挙げられており、非常に明確に鍵盤ハーモニカの有用性が明記されている。

鍵盤ハーモニカの導入は、昭和40年代に推進され昭和50年代に入ると学習指導要領にもオルガンとハーモニカの代替楽器として有効であるとの考えが明確に示されるようになったことがわかる。

## ③教科書に見る鍵盤ハーモニカ指導の特質と役割

教科書に掲載された鍵盤ハーモニカの指導の特質を明らかにするために、現在使用されている教育出版と教育芸術社の2社の内容を検討した。楽器の製造は1961年ごろから始まっていたが、教科書に鍵盤ハーモニカについての言及が見られるようになったのは1968年に告示された学習指導要領に対応した1970（昭和45）年のものからである。現在の教科書では、鍵盤ハーモニカの指導は第1学年から始まる構成になっているが、1965年の教育出版の教科書では第4学年に鍵盤ハーモニカの指導内容が掲載されている。同時に、指導方法や指導内容がページを割いて掲載されており、ハーモニカの代用楽器として歌口だけ個人持ちさせて一斉指導で取り扱う学校が多くなったこと、運指についてはオルガンの指導と類似していることが記されている。

ここで特徴的なことは、オルガン演奏の運指という身体操作を習得した後、吹奏楽器の身体操作であるタンギングの練習を行うことが示唆されていることである。低学年のオルガンの学習と3年生からのリコーダーの学習を応用させていると考えられる。

1976（昭和51）年に出版された教育出版の教科書では、現行の教科書と同じく1年生からの指導が行われるようになっている。1970年の指導内容と大きく違うことは、オルガンやアコーディオンでの同音連打やそれに

アクセントがついているようなフレーズは、楽器の特性上表現しにくく、結果として歯切れが悪くなり重さが残ってしまうが鍵盤ハーモニカではタンギングによって容易に表現できるということに着目していること、これを受けて鍵盤ハーモニカのタンギング指導に重きがおかれるようになったことである。従って、細かな運指の指導よりも先に、ロングトーンでタンギングの練習をさせるように指導の流れが変化している。

このように、ハーモニカや鍵盤楽器（オルガン）の代替楽器として示されていた鍵盤ハーモニカは、1976年の教科書では吹奏楽器としての長所が明確に前面に出されており、教科書では学習指導要領に先行していること、また鍵盤ハーモニカ独自の面白さを表現するための演奏方法を低学年のうちから学習する構成へと変化したことが明らかとなった。

### （3）楽器を演奏する行為の音楽教育的意味

鍵盤ハーモニカ導入初期の教師の見解からは、楽器演奏が児童の成長にどのようにかかわるのかという言及までは見られなかったものの、「代替楽器」としての位置づけから類似した各楽器の発音原理を比較し、身体操作や楽器が所持している表現能力の違いをとらえていたことが明らかになった。楽器はその発音原理によって演奏時に様々な身体操作を必要としており、演奏者が身体を注意深くコントロールすることで、楽器からより多彩な表現を生み出すことができる。楽器演奏において、児童が自ら生み出す音を注意深く聴きながら自分の身体と向き合うことは、筋肉操作や視覚聴覚、触覚といった身体感覚の成長を促すだけでなく、他者との無意識的な身体的共振の経験を重ねることによって意識的な協調にも繋がっていくと考えられる。

## 4. 今後の予想される成果と展望

現在の器楽指導において、楽器演奏技能の習得には時間がかかることから十分にその楽器で表現できるようにならないまま別の楽器の学習に移らざるを得ない状況がある。本研究で明らかにした楽器の特長や各楽器の導入初期に認識されていた狙いや思いを今一度見据え、それを視座とすることによって、楽器の技能指導に関する授業や児童の実態に即した器楽指導を提案することができると考えられる。また、この研究で得た知見、及びこれを基に新たに提案する指導方法を、教員養成大学での授業実践に盛り込むことによって、より一層音楽の本質に基づいた音楽教育の理解を図ることができる。

さらに、この研究を基盤として、授業実践研究及び学校教育における器楽指導の変遷を主題とした研究を続行し、科研費の獲得へとつなげていきたいと考えている。また、これらの研究成果を論文としてまとめ、投稿することを予定している。

### 【引用文献】

- ・佐伯胖ほか（2013）『新装版 アクティブ・マインド：人間は動きのなかで考える』東京大学出版会，p.19。

○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。

○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。